



| 朔日   |  | 三日             |  | 四日            |  | 五日              |  |
|--|--|----------------|--|---------------|--|-----------------|--|
| <p><b>五月之部目録</b> <small>△印ハ能潜の李持のメ</small></p> <p>○養生の法○風雨の考○米の豊凶○妙茶其外人家重法の事ハ西々ハ数多ある故目録ハハある事</p> |  |                |  |               |  |                 |  |
| <p>△芒種節 △梅雨</p>  |  | <p>△夏至中</p>    |  | <p>△松本祭</p>   |  | <p>△菅浦興</p>     |  |
| <p>△上如茂足揃</p>  |  | <p>△菅浦尊</p>    |  | <p>△五日節會</p>  |  | <p>△左近真手番</p>   |  |
| <p>△騎射 △馬弓</p>   |  | <p>△端午節</p>    |  | <p>△左近真手番</p> |  | <p>△端午男女衣服ハ</p> |  |
| <p>△生花の式</p>   |  | <p>△内膳司供早瓜</p> |  | <p>△端午節</p>   |  | <p>△端午男女衣服ハ</p> |  |



△菖蒲引 △永振 △菖蒲鬘

△菖蒲酒 △蘭湯 △菖蒲湯

△菖蒲胃 △削懸の甲

△穢 △かろ甲 △印地打

△藥日 △製神麴 △藥玉

△長命線 △結命線 △避兵線

△藥草摘 △藥草合 △神水

△五月鏡 △鏡餅 △粽

△笹粽 △節粽 △射粉團

△柏餅 △桃印府 △画天師

△退水神 △艾人 △泉羹

△競渡 △水馬 △競馬

△加茂競馬 △生玉流鈔馬

△六日菖蒲 △今宮祭

△宇治祭 △植竹

△室祭 △今宮祭

△面社祭 △有無日

△虎涙雨 △住吉御田植

△山田御田植 △祇園に洗

△月令 此部は八日の定まり

△最勝講 △賑給

△富士祭り △内宮外宮御田植

△瀑布 △麻布 △生布 △永平 △半平

△八廿

△三廿

△八廿

△六廿

△五廿

△三廿

△半復生 花 △大原 花

△締 花 △草 花 △草羽織 花

時令 此部より七月の時候

△五月雨 △梅雨 △雨

△五月閣 花 △白 花

草木 此部より五月一ヶ月の草木のつぼみあり

△榉花 花 △山梔子花 花

△柘榴花 花 △繡樹 花

△女貞 花 △南天花 花

△栗花 花 △杜鵑花 花

△要花 花 △合歡花 花

△榭花 花 △百合花 花

△車百合 花 △姬百合 花

△見百合 花 △唐百合 花

△袂百合 花 △鬼百合 花

△糸百合 花 △紫陽花 花

△紅花 花 △天門冬花 花

△蜀葵 花 △錦葵 花

△龍葵 花 △萱草花 花

△下毛花 花 △金盞花 花

△金錢花 花 △金銀花 花

△夏菊 花 △茴香 花

△時計草 花 △威灵仙 花

△屏李 花 △美容柳 花

△酢漿草花 花 △蜂子 花

△蕺菜花 花 △草石蠶 花

△接萼花 花 △天南星花 花

△苦花 花 △朝菊 花

△豌豆引 花丁 △蠶豆引 花丁

△花且見 花丁 △花昔蒲 花丁

△菖蒲 花丁 △雪下 花丁

△朝露州 花丁 △長根草 花丁

△蚊帳釣草 花丁 △玄及 花丁

△萍花 花丁 △藻花 花丁

△鐵線花 花丁 △樵子 花丁

△田植 花丁 △早乙女 花丁

△田歌 花丁 △田草取 花丁

△早苗 花丁 △菱花 花丁

△若竹 花丁 △竹品類 花丁

△艾刈 花丁 △真菰刈 花丁

△石曹 花丁 △和布刈 花丁

△海帶刈 花丁 △李子 花丁

△揚梅 花丁 △氣條桃 花丁

△無花菓 花丁 △天仙菓 花丁

△枇杷 花丁 △青梅 花丁

△杏子 花丁 △櫻桃 花丁

△桑実 花丁 △青小袖 花丁

△薑 花丁 △生胡桃 花丁

△早松茸 花丁 △小加子 花丁

△新茄子 花丁 △瓜花 花丁

△早瓜 花丁 △胡瓜 花丁

△姬瓜 花丁 △栗蒔 花丁

△稗蒔 花丁 △柰蒔 花丁

△胡麻蒔 花丁 △種蒔 花丁

生類 此部は五月一ヶ月のりく  
のいさかをあらわす

△獸狩 ウシノコ △照射 ウシノコ

△鹿子 ウシノコ △魚菜 ウシノコ

△水雞 ウシノコ △黒鴨 ウシノコ

△水鳥 ウシノコ △諸鳥 ウシノコ

△毛 ウシノコ △鴛鴦 ウシノコ

△鴉 ウシノコ △鴉の巢 ウシノコ

△蛆 ウシノコ △初蟬 ウシノコ

△小蜂 ウシノコ △蠶子 ウシノコ

△大馬 ウシノコ △蚊 ウシノコ

△蛇脱皮 ウシノコ △蟻 ウシノコ

五必用 此部は風雨の占○破軍の南方○  
日取の吉凶○他行の心得○作事の  
よし悪○料理献立の法食物の好悪等○  
の外重法のく品々あり尤も○  
事ハロの日令の部はあり爰ハ日令のこ  
まうする五月一ヶ月の要用のことあつむ

### 五月之部

△印ハ季を  
持ツリ



冬至ハ一陽  
生る如  
夏至ハ又一  
陰生ると  
陽極ッて  
陰生する

○天風妬ハ女の莊んを封た  
とリハし不貞のかりあり

異名 △仲夏△蟬月△皋月  
○南訛 ○蒲月 ○夏

五△夏半 盛夏△蕤賓△さ月

△早苗月 いつろ月△ひのいろ月

たぐさ月 莫傳 吹花月 藏玉

△たるとる月△ささ月△月を月

異名註 △仲夏ハ夏のかりん  
△蟬月ハ月令ニ日

月令蟬首とつる故名づく  
首ハ星の名あり。南訛ハ書經

平秩南訛とあり夏時物のさくふあり變化と云ふこと

○蒲月 蒲の音 蒲の事 夏五夏のふりむ△夏半 是も夏の

ふりむ 盛夏ふりの盛なり△糞實 糞の下げて主く實の客の

陽氣上より下りて陰氣主入とありて客と敬するの義なり

○五月の律あり○早苗月 早苗と云ふ月をいひたり○さく月と畧さるるなり

○秘藏 さくを月 津道ありはるもほはるはるなり

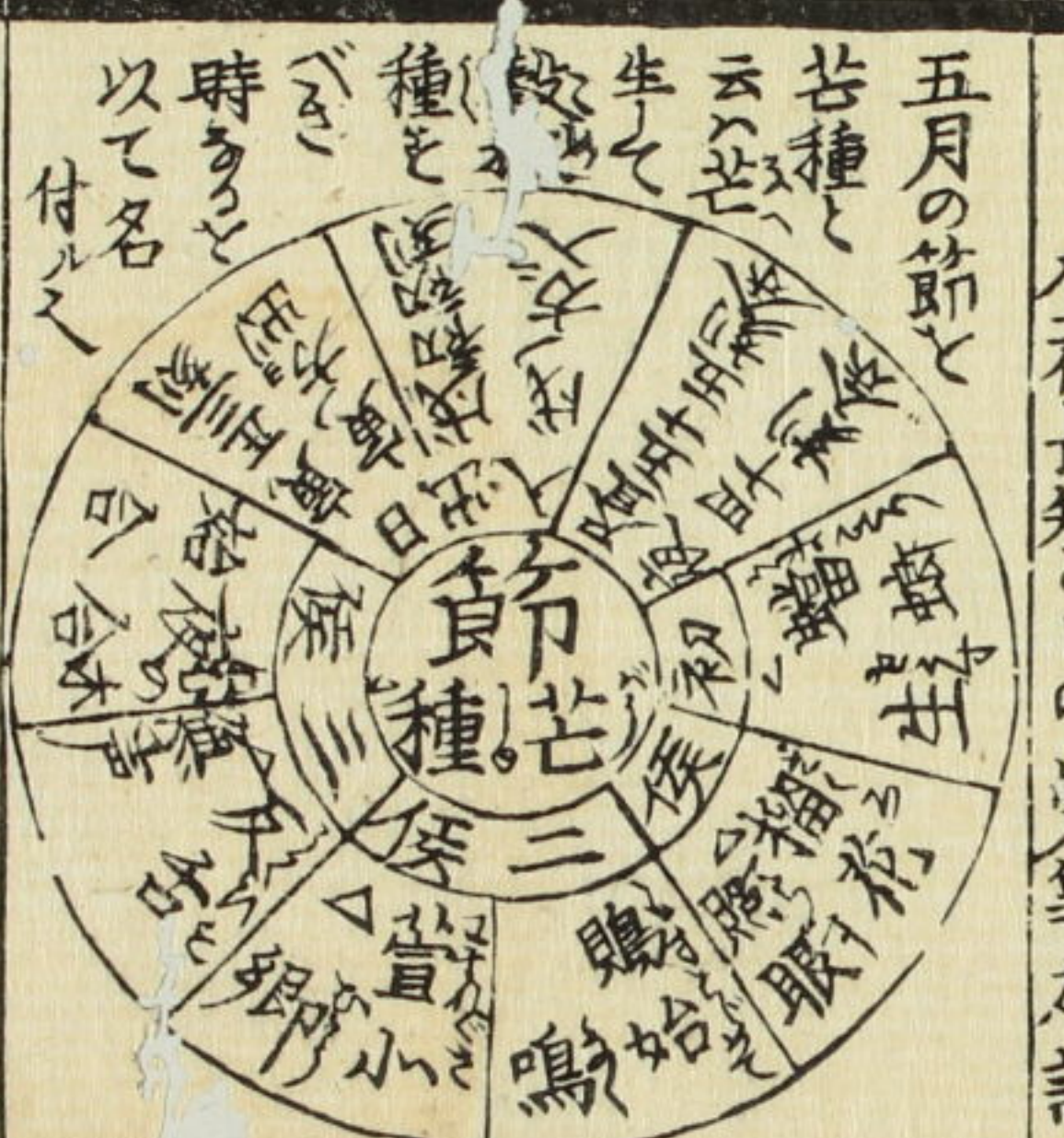
○秘藏 さくを月 蔵玉 はるを月

み月夜の晴るもるをぬきまや月と月といひたり

全 たらされ月 なる代より揚月の名なり

まのふひじのたけいそふん

節 △芒種 七十二候。草木七十二候。昼夜長短の日の出入等左記



五月の節と 芒種 云々 生て 種と 時多し 以て名 付る

○蠶螂ふりの氣の陰なり此月一陰下を生るなり微陰の氣の

感して蠶螂が生ると此虫も物に向ふ時ありとあり

○鷓鴣の陰類物を移して害すふ鳥一陰の已が好氣の生

る感して鳴るの反舌の鶯なり是の春の始陽氣を悦んで来り鳴く一陰の氣と

さめて音を入るなり

兆稱多く空一の芒種の雨一

是を多るまふ此日雨ふまは

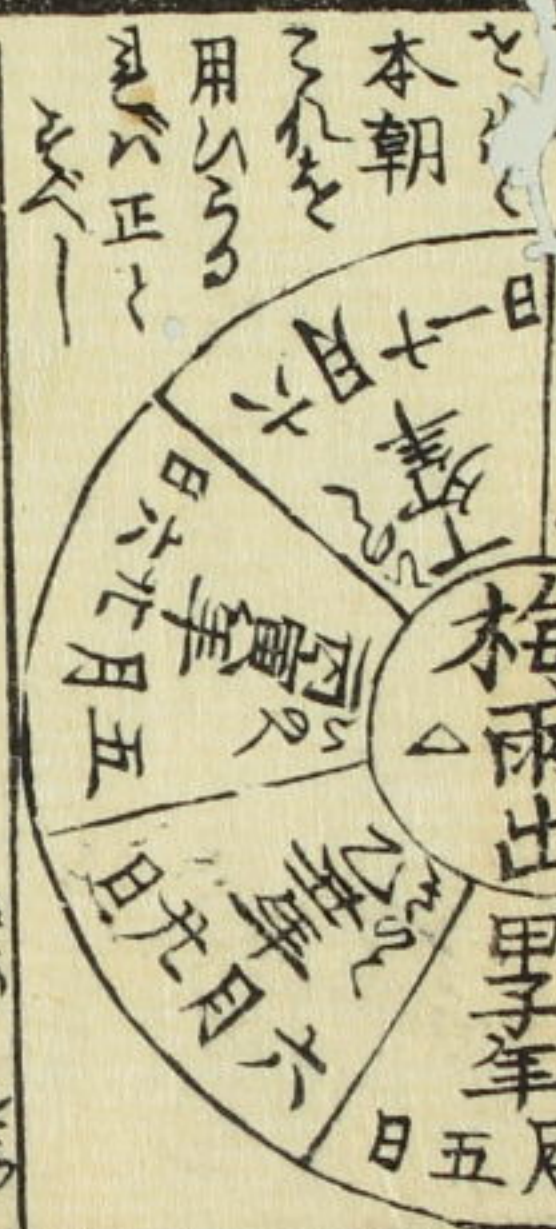
多し旱の雨ありくつても多

つづの日中小一丈の竿を立て

景と測る四尺二寸五分をいかに

梅雨出の説 次丸の内記を

支那のにも出



按て五月梅まき黄と落

んとす柘榴の花ひき栗の花

甚と多うすといふもあつて

石ど入る物くいと生を雷鳴

を以て出梅す○京師烏丸中

立身下町町のちまき又大徳寺

門前の人家のけしろ并は梅

雨の穴あり其時又至る水は

つる晴んとすれは水うくの松

州丹生の山田栗花落理左衛門

宅は井あり徑三尺深サ一尺梅

雨は入て水必く出梅の比水は

梅 天気 梅雨の多く西風南

かく風アれ時いふと風るは

空は雲多く天氣くくるとんを

あう出を是とくるとんを以

雨の内朝東風二三日は事て

吹は空も白くまる是を船艇風

といふ雨とくくこの雨をいふて



五月 梅雨  
 五月三日  
 五月五日  
 五月七日  
 五月九日  
 五月十一日  
 五月十三日  
 五月十五日  
 五月十七日  
 五月十九日  
 五月二十一日  
 五月二十三日  
 五月二十五日  
 五月二十七日  
 五月二十九日  
 五月三十一日

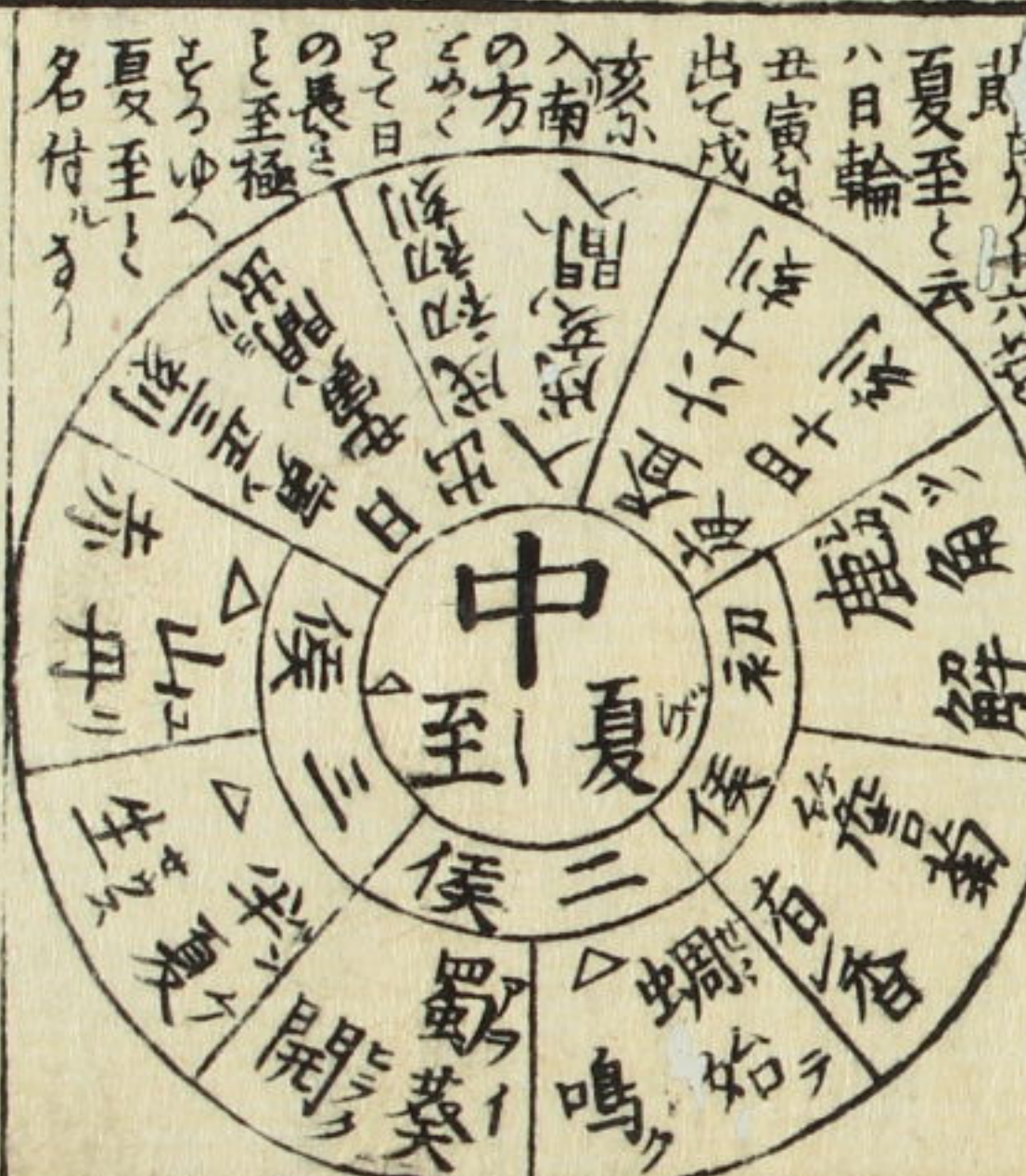
雷鳴を頻りに  
 梅雨の内は雷鳴なく  
 鳴る洪水と主として夜鳴り或は沖へ  
 入り入るものへまて宜う  
 新題林 重條

雨の色はくぬぎもあつし  
 連句のまゝとあつし梅の両昌林  
 花のまゝとあつし梅の両昌林  
 詞のまゝとあつし梅の両昌林  
 能言蒲のまゝとあつし梅の両昌林

妙梅雨水 壺に入貯へ置べし  
 茶を煎ずれば甚美之  
 癩疥を洗へ其痕うつる  
 将香油と造まば熱し湯し其外  
 衣を洗ふは用まば灰汁れじ  
 ちるまども此水久く貯へば  
 〇はるまどあつしと去るまびらと  
 を用ひ頻りに入る即ち落る

梅養生 梅雨中の湿を護  
 散ると蒼木と  
 火は焼て煙とぬぐべし雨湿を  
 病と生むるこころ

中 夏至の七十二候。草木七土候  
 〇昼夜長短〇日の出入等左記  
 夏至 八日輪  
 出成 丑寅  
 入南 卯辰  
 の方 巳午  
 の長 未申  
 と至極 酉戌  
 夏至 亥  
 名付 子



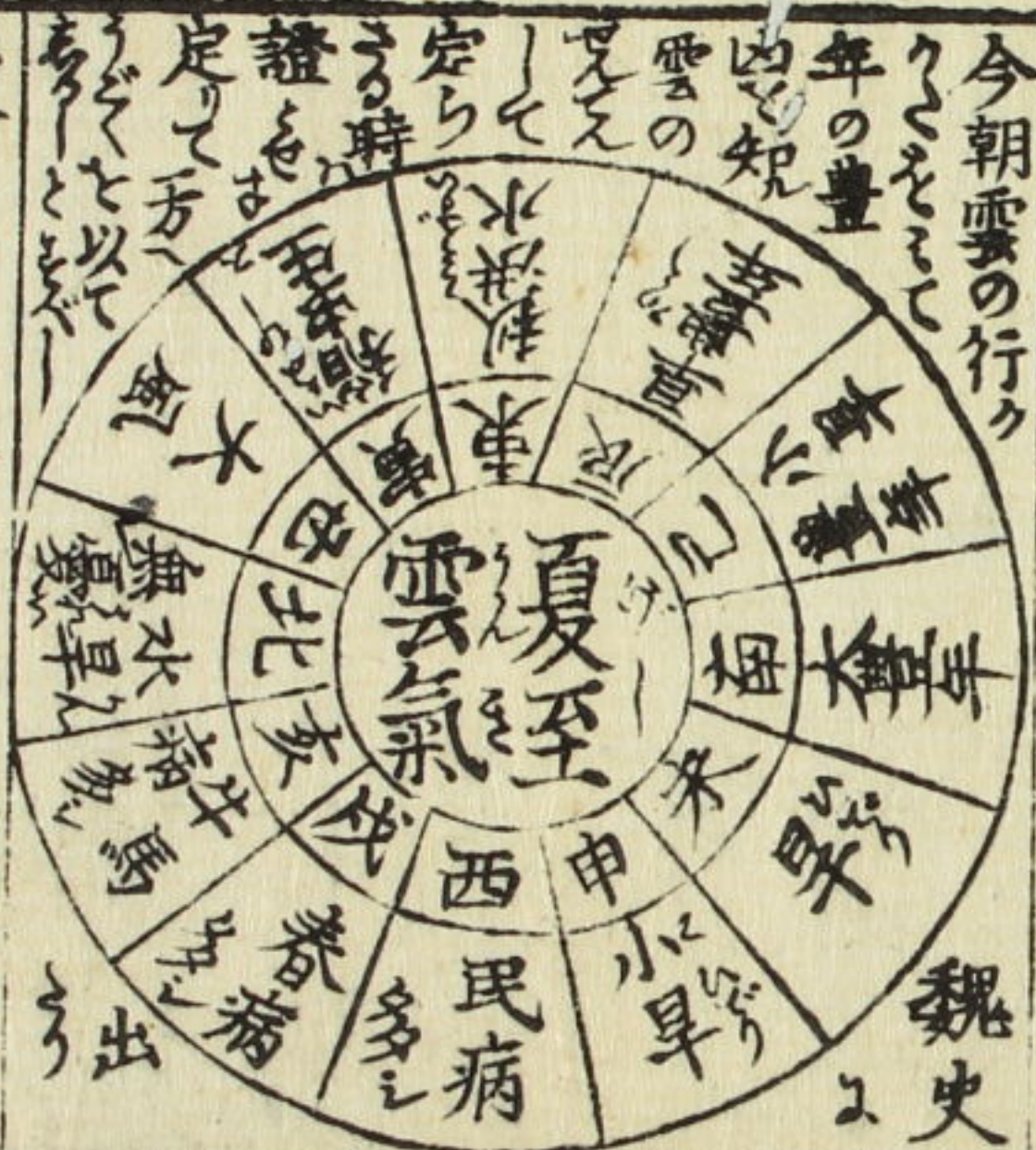
鹿の角のまゝと三ツあり左右合  
 せて六ツあり十月は一陽生  
 此月まで六陽終り一陰生と  
 氣ふ感して角と落と鹿の  
 〇くより六陽の氣と感して  
 六月めて生とるの〇の〇

ハセミヨリ其声を聞く小人の心ととぬーむる陰虫あり  
微陰ニ感じて鳴る△蟬の初声もいふ○半夏の暦の時候  
ハハ△半夏生とあるて種物と云ふ事又古代より此前後を以てゆる物多し其時をちぐんど生とる草あり

夏至天氣占候 夏至の日

西南の風あれば六月の洪水あり  
○晴天なきは六月暑氣つよく  
旱しく○北風吹べ水さうりふて  
夏中夕立多く米穀ゆこりこ  
○夏至中旬小あまは豊年あり  
下旬小あまは米價貴し○當日  
雨さうらぬ淋時つよく久雨と主る  
去るさうらぬ小雨の宜しとす  
○黒雲多し水難とす○日小  
暈あまは洪水あり○雷鳴は

六月のどろ甚し○午の時南方小赤雲あるは五穀大ふその  
ふ赤雲なく日月小光なきは  
五穀ののど人病多し



夏至養生 夏至の當日井とさうら

水を改まは瘟疫と瘧  
む○夏至の日夫婦の交りをもや  
と瓜忌む千金方又出さうり○  
月令に此日菲少ふく其外を  
きりのを食せど淫欲を犯と  
る陰陽争天地死生かてり男

子齋戒と声色と歩騷事をく  
心氣と定め保養と云ふ日なり

**日令** 此部は五月一ヶ月日の定  
る事文の定方事と記す

**朔 天氣** 今日晴天少し五穀  
はじくふりしは五穀

よかば〇雨ふりて大風も旱  
米價貴し北風も猶さう悪

〇東風半日吹ひ終  
日吹ひ米の價貴し

**養生** 今日  
沐浴

〇上賀茂足揃  
して老いど 京

〇松本  
祭まる

**南都** 眉  
間

寺聖武帝三  
尊像開帳日

**天氣** 今日晴  
篠ありし

**献 菖蒲** 今日内裏へ  
奉ふとさう

神平野大明神  
〇松崎氷室祭

**二 近江** 松本  
祭まる

菖蒲輿 左右の近衛兵  
衛の六府あり

免の輿と南殿の階に東西  
に立又時の花をありそゆ

まゝく京 高雄虫千三  
れくとさう 日より九日を

**四 菖蒲茸** あやめ松屋根の  
軒に置とさう

玉葉集 公雄  
今日とつをあやめみとさう

形勢ありある蓬生乃之初  
能 菖蒲と云ふ形所の初つき起渡

此頃を盛夏より毒虫多  
く生ふるふより 軒に蓬菖蒲

をかさうとさうも虫の入り  
ぬきとさういかり

蓬茸 是もあや  
江戸 三の  
輪祭

棟茸 俗小せんえ  
肉膳司

供早瓜 山城の御園より

五不成 天氣 本朝米賈の

五ヶ五とくあり四月三日

定め價の高下とるを晴と

五日節會 天子武徳殿より出

ふ典薬頭はくえと奉事

左近真手番 左近乃馬

より事あり右近の馬場ふ

今日近衛の隨身禰の尻

と引折てきるゆふひをりの

日とく左近のあり手番の五月

三日右近の六日あり非人の受

騎射 五月五日

とあり是を馬弓といふ

端午節 端五といひ初五といひ

五の始る日今月の五は始

或い五月五日ゆへ重五といひ

一説い午のいふは五の字

五日異名 重午 重五

地臘 薄節 解粽

天中 送節 朱符

異名註 重午午の月昔の  
午の日と用ひられ

ハカミカハルむまきり△重五  
ハ五日五日さればさく解粽

節ハちまねをとくぬま

端陽ハ正陽ハ同。地臘ハ  
一陰生ざるなり其外の異名

文字のよきいありてさるる  
艾節ハ世達を作る魁を門外掛  
けく部氣を拂ふ也。 倭ハ出

端午衣服 今日より帷子を着  
袴をきく色又浅黄

女衣服 女もひもへのさす  
月のひびびり

上着ハまじのあせうがさ  
おとさじの色筋をうするを

めとよく節句ハ花あやめのも  
やうわう或ハひびきさるる

生花之式正 菖蒲 花菖蒲  
石竹 蓬

菖蒲引 菖蒲菖  
新勅 前関白

深さハはまきふあうりあやめ  
年の終るうたきとほいそひく

夫木 寄菖蒲祝 為相  
君代ハ引きたるむささぎの

ふさうれあやめさるるなりを  
夫木 江中菖蒲 仲正

あやめさるるさるるあうりあやめ  
かへさるるのほをさるるさるる

詞 世沢のあふ波ぬきてひく  
ぬまよふふるて多ふかた

菖蒲五字對句  
菖蒲五字對句

揮鎌若轉月 緑成玉床席  
カニカニ 月夜夜夜

拂水生連珠 顔兼清夜娛  
カニカニ 月夜夜夜

永根 哥よあやめさるる根  
とむさるる永承六年

くありしやう著問集に出る

杖をさねのたけういふやう

くはやまのひさるるるん俊頼

昔蒲髪 聖武帝の時又初

昔蒲案 昔蒲生梳を黒木

昔蒲枕 夫木 俊頼

帷子 昔蒲浴衣 宗和

昔蒲帯 棟佩 昔蒲

昔蒲酒 石昔と切て酒ふ

昔蒲湯 百節の昔蒲の病

昔蒲刀 昔蒲と

昔蒲曹 削懸の甲

昔蒲 此日幟 甲

昔蒲 光仁帝の時蒙古の

昔蒲 此日幟 甲

昔蒲 光仁帝の時蒙古の

昔蒲 此日幟 甲

昔蒲 光仁帝の時蒙古の

昔蒲 此日幟 甲

昔蒲 光仁帝の時蒙古の

昔蒲 此日幟 甲

五月 日 令

賊来る早良親王討手

て出陣あり親王伏見

森社より祈る時小五月五日忽

風吹て戦いごとし勝事を

得たり此例ふりり唐ふも

今日武事とるんと戯を

と事類書纂要に出る自

然る此月武備とす和漢

習合せいさるべし

肥瘠瘡の強とる小機を其角

女の子のあやうのりか律人

移竹のり作肉のりか移竹

狂刃を産生いさるあえみ

細とる紙のりか

紅管

印地打 童の小弓と持て戯

ころし印地をほの跡の標付て

印地とくさるふりて名付る

非あふふりて印地をうつて嵐雪

移竹

薬日 新撰六帖 賈之

先孝孫そとる日たるとり

○今日と茶日といふ茶草と取

或ハ九散と調合とるふり中に

も今日制とる茶を記す

紫金錠 諸毒と解し腫物と

消し毒虫ととる神方あり

五倍子 批目 大戟 續髓子 十枚

麝香 五枚 右細末して丸と其外

豊心丹 固本丹 延齡丹 反魂丹 等

とる今日調合とる

或ハ神效 今日製と

薬玉

夫木 中宮上総

あふふりてりたふあふふりて

ふりてりたふあふふりて

○今日茶草と五色の糸とて

のりかくまハ悪氣を拂

とる奇は悪氣とるあふふりて

長命縵長命縵續命縵續命縵辟兵縵辟兵縵條達條達

皆素玉の事五月五日の神玉立

續命縵之詞 萬楚

西施謾道浣春紗西施ハ吳美人ナリ

浣紗石ハ碧玉今時閨麗華故事ナリ

碧玉モ春秋ノ時ノ美婦之器量ヲクテベアラソフツ

奪將萱州色ナルハ草ノ碧丸

ヨリハ色紅裙妬殺石榴花ウルハシ

モスツノ紅イナルハ花ノウルハシク見事ナルヲ子タムバカリナリ

新歌一曲令人豔タハハメ

ツラシク人々ノ心モ酔舞雙眸ウキタツバカリナリ

斂髻斜酒ニ酔テ舞ノ袖ヲカヘレ目モトニ風情ヲフ

タリ誰道五絲能續命カ

シカラ五絲續命ノ故事ヲイヒツタハレコノ故マヲ見テ

却令今日灰君家其美羅

イヲ失ヒ死セント思フハカリナリ

藥草摘 今日收採をばし

て製競菊 是も百草をばし

馳競侍葉微云

月ふるるをり

鬪百草 色

の草とト也合せて勝負ニ争ふた

神水 今日午の時雨ふる急

ちふる神水あり是ここのカバ百

病を治と或ハ丸薬を製すべし

五月鏡方玉葉 為家



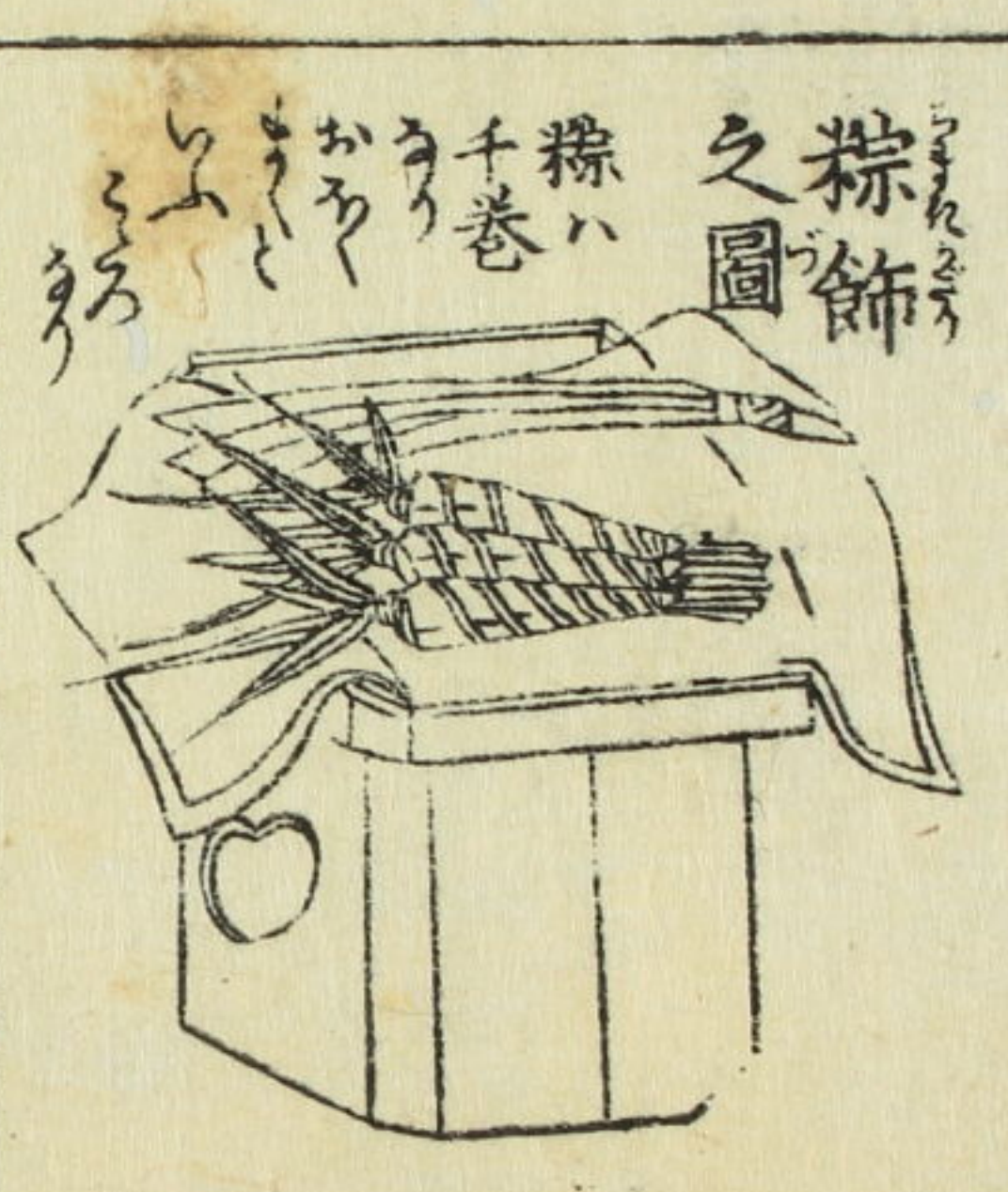
浪のまを鏡々下り 百練

鑑 今日午の時楊子江にて銅を百さびとて明鏡を

鑄りてこと事文類聚に出づ是を以て本朝哥ふも詠す

粽 異角黍 錐粽 秤錘粽 名 菱粽 九子粽 角粽

金廬粽 密粽 節粽 飾粽 菰粽 粽伊勢出



拍餅 ひりひりの葉日 けりり 拍も神道

小用ゆめをそねりかゝるれば けりりなる産いともべま

今日のかざり月の毒瓶と拂ふ ため夏ハ毒虫多く人の家小

も入り来るによう 粽の蛇の形小 表と是と食すは被を降伏

とる心して夏の中口をこころふ き事と表りて祝をさるる

非多きぬ女は粽をさるるに思貴 夏はアヤつまてまの思ひ粽 其角

狂者ふふさるれよは赤令の 粽もハさるる粽をば 行安

南薰應律轉宋旗 五月八午 二属レ南

方ヲ主ル 火帝衆離錦席披 色赤シ 夏ハ火應レテ神ヲ火帝トス易

三テハ離ノ卦ニアタリテクワ兼ニ坐 席ヲ 榴吐千花兼羽蓋クガ

カザル 口ノ花ノ紅キヌ 眞開五葉拂 ガサニ映メ美シ

瑶墀ヨウチ 堯ノ時莫莢アリ一月ニ

瑤墀ハタニクニワセ兼盤セ錯出サス

仙人掌セニ 天ノ甘露ヲ兼盛ル器之

織女オリメ 織女ノ制仙人ノ像ニツク

方競渡ウツク 此日蛟竜舟ヲサヘ

御恩更許向昆池ウツク 天子ノ恩

蛟食芳辰ウツク 羅ワ没ボ後

五色の糸と以て茅チはくクて

の始め之委ウしく本篇

博物全ボ見ミへル

射粉ウツク

團ウツク 渚粉團水團白團唐

一一世一又一宮中一ホ一テ一團一子一ト一シ一

是と射ウツクて食ウツクらる事ウツク天寶

遺事ウツク 唐ウツク士ウツク高ウツク辛ウツク

小沉ウツク其ウツク其ウツク水ウツク神ウツクとウツクりウツクてウツク人ウツクとウツク

をウツクてウツク海ウツクとウツク入ウツクれウツクバウツク則ウツクちウツク五ウツク色ウツクのウツク

蛇ウツクとウツクるウツク也ウツク水ウツク神ウツクとウツクりウツクてウツク人ウツクとウツク

るウツクやウツクまウツク桃ウツク印ウツク符ウツク

れウツクはウツク篆ウツク字ウツクとウツク符ウツクとウツク書ウツクとウツク書ウツクとウツク書ウツク

術ウツク 赤ウツク靈ウツク符ウツク 今日ウツクのウツク符ウツクとウツク

呪ウツクりウツク 艾ウツク人ウツク 唐ウツク土ウツクのウツク艾ウツク言ウツク

形ウツクとウツク鹿ウツクのウツク形ウツクとウツク決ウツクりウツク門ウツク戸ウツクのウツク

うウツク余ウツクかウツクるウツク△ウツク蒲ウツク人ウツクとウツクもウツクりウツク

戴艾虎 唐土にて艾ふて虎を作り黒豆や

るる小虎を色を此糸にて作り艾の葉をつけ頭かひをまきて

邪氣をこ画天師 張天師の像を

画にかき又至るて作り艾を

毒氣をこらるといふ本朝去 元三大師の御影をこらる如

鶺鴒 鶺鴒の 零陵託は鶺鴒一飼は五月五日ふ其

羽の尖を吞れはよく物のひら

ををるるると鶺鴒を過り 梟 梟の 梟を

けりのあがり鳥と百官ふ 立鏡 賜へし漢書ふ出たり

渡 今鳥車 永馬 屈原酒羅

心して今日競渡のたのしみと

をを船のわろく早こと

水馬ともいふ人船を

車といひ楫を馬といふ

狀 賀端午文 左の尺牘 即漢文を

端午之 祝規

同日度 賞

堪 賞

不願 不願

粽一折 毎例

敢 敢

留 留

尺牘

上中下各替

午日祝規

①天中佳節 ②端

午之定秩 ③五絲糸節浴蘭

節正屆 ④堪歡賞 ⑤多壽萬

福 ⑥壽詞何盡 更欣躍 ⑦

多快欣々多々 更不顧不腆

⑧不憚輕儀 ⑨不羞菲薄 ⑩

無論鄙品 薄飾 輕帷 單衣

楚粽 角粽 黍粽 菰葉粽 從

例 ⑪謹因舊規以奉獻 ⑫

逐儀例 獻納 ⑬菲儀以投

希笑云々 冀笑存鑒我芹

曝 ⑭惟鑒納為幸 ⑮請願

留

狀 同報告

左尺牘 漢文アリ

涉仗時文 妙年 為佳義

辱使 傳蒲節之吉辰

見事之佳者 一打 俾 大才

送 鮮美 嘉魚 以

結 接 水 境 人 祝 多 壽 涉 意

錦 堯 莊 廉 偶 人 與 豎 童

以 懇 情 以 示 才 之 奉 納

蒙 簡 厚 賜 誌

仕 以 從 約 之 教 之 札 了 之 述 人

拜 謝 期 多 日

尺牘 上中下各替

辱使來使傳命 ①勞貴介

蒙使命 ②恭承顧命 傳蒲

節云 ③賀端陽之辰 ④祝

綵縷佳節 下 嵩令辰 送鮮

美云 錦鱗下賜 珍魚

芳惠 惠嘉魚 錦兜在麗

王飾奇偶 綺羅金人

與豎童 附小子 授豚兒

蒙箇厚貺 辱賜數品 更換

多儀 叨蒙分惠 拜謝

對使拜喜相逢 以謝之拜

受無顏 暫待異日

妙治眼病 絳の袋 柘榴の

術花を盛て 今日眼と洗ひその

まゝ是と棄る ことゝる小汝我

病ふ代とて 唱べ 治る事

妙なりと 養生雜記 なるなり

治淋病 首尾浦根を取細末して

たしるゝ置阿膠と等分合して

用内兩三度用ひて治る 治久痢

今日鯉の枕骨と黒焼ふてた

さゝ置くべし久く止りかひる

痢病よりえて其効神のお

不病痢病 今日へびらちを取

朝露をわて置一ツ水うそ吞ばその

年痢病いやく流行てもう

ぬと妙く衣服虫をぬる法今

日苜の葉とてて櫃箱の中へ

入置ば其のづゝ虫を生ぜざるなり

蠅のつらさる呪 百虫のつらさる

蠅よのささるさぬめでありこそ

とれしつ此哥と三返唱へ白乃

字と四方の柱よ逆さぬ張リ又

岡とつ字と棟ととも天井こそ

も真中にては但しつまも文

字かく紙一才四方真四角を切

てかくべし 今日午の刻ふ此法

の如くめでおせば其年中家内

ふ蠅いづ 辟除術 今日午の

刻石首を採て晒し乾し末じ

蕭の下へ放置けバ登長くこま  
ず蚊と辟る咒 今日午刻儀方

の二字を書て家内の柱の中へ  
まじり粘ハ蚊をこり又酒と蚊條の  
葉にまじりて座の四方の隅に挿  
せば蚊も其條にすがりまぬる

又法 今日午刻燈心を油の内へ  
浸し日輪まじりて天上の金雞

蚊子腦髓の液を喫ると右の咒  
文をと返唱へ念し終りて太陽の

氣を吸て燈心の上へ息を吹さ  
夜今この燈心は火を点されば蚊

こしく去る 又法 今日浮萍を  
とり陰乾みて細末を樟腦を

加へて拌せ彈子の大小丸にて  
毎晩の蚊を火くして林火に家内

の蚊こしく水となる 物覚るま  
人ふ物忘れさせぬ法 今日蚊籠の爪

を衣服の縫の中へ入置ば物忘れ  
やむ 夫婦中惡さを和順する術

今日鳴鳩の足は骨ととりて絳の  
袋へ入男の左の手女の右の手はけ

置べし又常々 京 賀茂競馬  
袂へ入せしは

ひ馬。赤方黒方として左右まつ  
かひて馬くくべしなるなり

非 けいりるる人やあぢはる上貴  
在 っさふのあぢなるくへる

まぐさもあぢはる令は又貞辨  
△藤江森祭。ひ馬あり此祭の古

実ハ幟甲の下 大坂 屋玉や馬  
記と 天王寺太子

堂法事 大和 天神 近江 関  
日の刻 音兼

神祭○三井寺南院祭神輿出御  
○大津高山寺貴船祭

六 六日菖蒲 夫木 衣笠内全  
いふせん今六日の

あやめまむく人もるを身なり  
非 六日菖蒲の初は菖蒲水悟文

七 京 今官祭 八 山城 宇治祭

申 陸奥 相馬中村野寺 妙現大祭 十 不成 就日

栽竹 龍生の節 又竹醉日 移

播磨 室明 五十 京 今官祭 紫野

是と執行と下松と云無御 江戶 黒

不動地主早尾 和泉 塚夫 京 神祭

永觀堂大般若轉讀 大坂 天

寺大般 丹後 九世戸の 大 龍燈 正月五日

坂 天王寺金堂 十 京 今官御 興洗

上御靈 廿 不成 大坂 天王寺太

大般若 日 就日 日 二 京 清水田村 近

子堂法事 音樂午刻 日 三 京 磨官忌 近

江 坂本兩 有無日 村上天皇

の御國忌之依 今日本禁裏小 政事

有無云 江戸 揚弓結 虎

淚雨 日 其妻虎愁傷世

排 中 虎 雨移竹

狂 秋 虎 毛を 得

京 下京中道寺祭 江戸 曾我

祭 江戸 初芝居 曾我

物語 を 此報恩 今日法

樂の哥舞妓とさるるりの白銀  
路駕れ森神明祭。目黒不動

泰○藥研 大坂 住吉御田  
堀不動泰 植今日堺

乳守の遊女御田とさるる事む  
く宮女悪瘡の愁ありて宮中

と出て乳守とさるる此病と住  
吉の神といのるあるあつた神託

して諸人又面とさるるいやうさ  
さなるまづいふよめてまのり

女ままいりり田をうへるる悪  
瘡ならさるるいふよめてまのり

てまのり乳守の遊女も田植女  
とさるるのまづいふよめてまのり

⑤夫本住吉社苗 家隆  
ふ苗とさるるいふよめてまのり

神とさるるいふよめてまのり  
非々の風人田のさるる神も来山

神とさるるいふよめてまのり  
ふと女のさるる神も神の柏子みす

### 伊勢

山田御田扇。宮司より  
扇を出しやまのり

常の扇よりいふよめてまのり  
扇の骨七本外宮の扇の骨の六

本檜とつらつら松の画とさるる  
比須の朔とつらつら墨繪の板

行ある藤々いさ物とさるる社人あ  
まのり此扇を持て舞うとさるる

御師より遠近の諸邸家へ送  
らる恒例ありこのあまのりの風

あまのり邪氣を除く田圃と作  
る者能みよと凶年はとさるる

### 晦京

祇園神輿洗。こよひも  
基四條官川のやと

あまのり水とさるるきやとさるる  
あまのりいふよめてまのり

の役者おのの家々の挑灯を  
とがさしてこよひと守護し奉る

いふよめてまのり見物と  
和泉 堺方違 明神祭



月令

此部は五月一ヶ月日の定まらざる事もある

最勝講

東大寺。奥福寺。延暦寺。園城寺の僧と

講師にて清涼殿講せらる

年中行司

内大臣

百重や五月の口はあきくく

いづれも草小御講の賑給は是

とて民小米塩など給ふ事と

何れも民の交泰をりしと

富士垢離 来月上旬より

登山と尤百日浴水潔齋と

伊勢 内宮外宮御田植

て長官車をいざー 瀑布

規式とあると多し

△生布 △半さじ △木平

△麻布 △布さじとく

晒賣 日めさる此あら

半夏生 五月中より十一

半夏生とらと以て農家

大原に 丹波國大原の社へ

三日参詣とらと春と云九月

絨 薄物 花 古代

の漆色と云く寛正六年慈照院殿大追物御見物の時射手の糞束よつど花の白帷を着るは是を以て考まひ漆色も定は其外

狂云とてよもや帷子れあふはひらりととておのほくふ 久清

非半まきく巖ま **單羽織** 薄織 織

非のちうらう風ごあまを為羽織玉芝

**時令**

此部より五月の時候

**五月雨**

梅雨 黄梅雨 梅雨

クダルの畧をり△まると雨のなぐ

**新書**

藤原定家撰

玉祥の乃移人のころつとあそと

家集 河五月雨

信実

五月雨ふつそら川をたさそを

家集

山家五月雨

推有

あびさるも新のくれ竹枝をへて

續古 海辺五月雨

家隆

神や不さらんごみくもはれ終

千載

仲綱

御集 江五月雨 後九条内倉

夫木 五月雨有餘 右衛門

五月雨のそとさうとこれおふら

たまためあしうらふくもは

詞目教ふるを人言日とやふか

ぬ山川の敷きへ雲ぬらとて雲と

つる。かきかゝるを。朝のやももどる  
ま。い。ふ。れ。ま。さ。れ。あ。そ。き。あ。の  
糸。同。人。の。を。と。ぶ。き。う。り。ま。め  
る。又。月。あ。ま。ん。も。い。こ。ね。

連。あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
又。月。あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

俳。又。月。あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
こ。後。や。海。ま。ふ。う。ひ。又。月。あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

狂。又。月。あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
か。ら。い。の。ほ。い。と。か。み。満。水

五月間 俳。竹。葉。や。秋。の。虫  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

詩。五月間五字對句同上  
海。霧。連。南。極。蓮。渚。千。峰。靜

江。雲。暗。北。津。梅。天。一。雨。清  
山。く。チ。キ。ガ。ニ。ツ。ネ。リ

詩。五月間七字對句  
帆。開。青。草。湖。中。空。夏。亦。寒

衣。潤。黃。梅。雨。裏。行。連。雨。來  
驚。風。乱。貼。芙蓉。水。五月寒

密。雨。斜。侵。薜。荔。牆。已。生。霓  
白。々。つ。ひ。う。ら。小。雨。降。さ。ぐ。折  
々。暗。え。と。く。り。け。き。有。云

黒。々。空。ひ。こ。曇。り。て。今。日。降。ゆ  
き。の。内。は。又。晴。の。日。に。有。云

草木 此部より五月一ヶ月の  
く。こ。木。の。類。の。あ。つ。い

糶。花 雲。見。艸。苦。棟。○。俗。云  
梅。檻。と。正。字。棟。こ。り

秀。新。古。忠。良  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

夫。木 家。隆  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

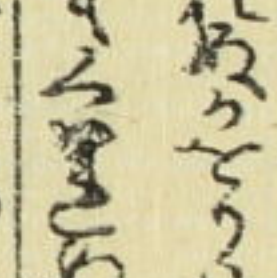
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春  
あ。ま。の。日。あ。か。け。後。乃。名。宗。春

詞 かわらうらうらとあけぬ。家の外面  
 おゆらうらうらとあけぬ。紫雲ふまゆぐん  
 吹風おあぬ。ふらこのあけぬ。うな  
 こあけぬ。まよ。小舟。河。うな  
 日教。忘れぬ。まよ。まよ。まよ。まよ。  
 加茂。小舟。

連 橋ももたれき。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 山 梔子花  木形 越桃

詞 いそぬま。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 連 くらさのあけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 狂 くらさのあけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 くらさのあけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。あけぬ。  
 の 篠飯光廣卿 石榴花  吉来

石榴三種あり本紅千葉白千葉  
 黄色千葉かり白世挑色あり  
 かりて珍らしく愛とふ  
 新撰六帖

足引の山松栢咲や半熟しよ  
 ちりちりたるいそひ侍り色

非 実のめ文やまのたのた極賀

詩 栢榴五字對句 同上

新枝含淺緑 露色珠簾映

脱萼散輕紅 香風粉壁遮

詩 栢榴七字對句 詩礎

風枝舞腰香不盡 不及春

露銷粧臉波初乾 落絳英

眉黛集將萱州色 度隙風

紅裙妬殺石榴花 春閨空

詩 栢榴之詞 白樂天

暉々復煌々花中無此芳

ソラキラくト見コトニサク此花ニ

カヤウナケシキハ思イガケナキコトノ  
ヤウニオモ  
ワルトナリ **艶妖宜** 小院修短

**稱祇廓** ヨクウツルイカイエダモ  
イエダモヒクイカキニト  
アヒヨクサイテアル

**女貞** 五月 緋花開く葉ハ

椿小似てきざし故に姫つづき  
又ハ△やぶ椿ト云 葉ハ四月草木ハ

**縹樹** 四五月の頃白花を開く  
葉ハ女貞小似てきざし

光あり四時凋まき只二三か  
落葉を 三ツ國増此木の皮を取

てハ 緋花開く葉ハ  
夫木 若くして 若の若葉ハらの

**南天花** 南天燭 南燭 男續  
染菽 楊烟 牛筋

**栗花** 花青黄 非 照んとて 義  
いよあつく栗の花 扇竹

**杜** 戸の尻さし木  
以栗と用まハ盗賊入らず

**鶉花** 三つさ種類をまのさ  
其中八木とて賞まら

の松をぬぐんぐらま紅。この  
雪神楽岡。少をた。か。人丸等入

△五月 躑躅とも書く今ハハ  
はくりつふ 石叢花 花更ニ出

**合歡花** 合昏 夜合  
青裳 萌葛

○花上ハ半白く下半紅なり葉  
ハ緑中夜ハ合す秘あかり如

いより秘あかりの木の中畧なり  
○人家ふらへて人ぞと怒ら

らし合歡ハ怒りを除き 萱州  
ハ愁をワケるといふ 黒丸子の

生葉なり 万葉 紀女郎  
ひつりさたるといふ ねむる ねむる

貞應二年百首 為家

秋といひあつた花ありぬほひけの  
神もまた及んばある月うず

⑤ 非花の多用の  
神花 今の世  
小用の中

さうたよの花ありしうも世木の  
色々説あり○三才圖會の神を

坂樹とかく花は白く少なき  
實は生青く熟は紅く百合

強瞿。重箱⑤ 夫木 西行  
を雀上るあ田ははる娘のうの

何よつくともるさか我のうの  
⑥ 夏の野。庭の面。あけふ

さげら。あつ田あつら  
⑦ 花の輪のどく花ひ

日光の産の黄いろ  
大峯より出るの迹 姫百

合 山丹。百合に似て  
花も葉も小



葉へ柳小似らう花赤し

⑧ 夫木 土御門院  
庭の面は去人さくさく甘菜は日

ひらり香をたね百合乃花  
⑨ 狂深草小咲もどる娘ゆり

小中、小町の神  
子であろ 花樂 兎山丹

⑩ 開花小さく愛を  
べ江戸より出 唐山丹

赤花びら厚し薄し  
さよめと緋百合云 袂山丹

白く葩厚く本琉球より来  
る深山の間繩ふとがいで是

取得て袂に入きて  
帰る依て此名あり 鬼百合

⑪ 卷丹。花赤く六弁  
黒点あり山丹より大

⑫ 狂 結句そちふ人真ひとやうだわん  
香瓜がさしり鬼百合の花教



鬼ゆりの名也 **系百合** 狂徒撰 忘るる名也 正甫

舌とくりにくくはちつと巻くゆり露玉〇百合山丹卷丹二類

三種あり此種数品ありて透明百合博多百合黒百合紅葉百

合紅百合其外 **紫陽花** 挙てかどへん



一名△四ひの花〇花葉ともよてありに似る唐

の白樂天初て紫陽名づく云 **公朝**

花極く人いなり川のみり さだつてさうあぢさゐり花

詞よひのた。ハチノミ 俳家函をてこまへりや茶枕嵐雪

**紅花** 紅藍花黄藍吳藍 畧言あり未摘花

小名はく〇漢張騫とて種を天竺より得て帰る本朝へ傳る

異より種を得り〇申日種をせむよく茂盛とて羽

州最上まて山形の産を良くと伊賀筑後とれつと豫州今

治せり比根州播磨と其次と守 **為家**

紅の末さくもかひ色ぬく 連ちびをまつてあせむはあ家秘

俳作嫁と如く笑白紅の花連水

**天門冬花** 一名くこせり

金花。高棘。海濱小生どり物 あり葉ハ杉の如く和らぐ

俳 天門冬とくき世 **蜀葵** そ枝の長くと小春

花五六十種あり色数品花形千 辨〇五月下旬花咲下より上丹

咲のかり開き盡る時を梅 **錦** 雨の終りとす大底ちるす

葵 花の大ぎ銭の大ぎたぐり  
白赤二種あり開るそ久し

龍葵 葉の形似  
て実ハ茄子に似  
似たり其始青く熟ると時黒  
く或ハ熟と赤き物と龍珠といふ

萱艸花  忘憂鹿  
鈕のそ子  
黄赤。百合に似たり住吉の景物  
かり(芳)夫木 為相

下級又けをくろまのふり  
くろふろまね人のけりく少

唐 李咸用  
詩 萱艸之詞

芳艸比君子 詩經ニ  
見ヘタリ 詩人

情有由 是ハヨシ  
アルコト 抵應憐雅態

味必解 忘憂  
花葉ノ風流温雅  
ナルヲ愛シテ憂ヲ

忘ルト云コトハ解  
スルニハオヨバヌ  
積雨 菰庭小

微風 鮮 柔  
雨ツキニテ菰草  
レケリハへんツヨキ

秋 莫言開太晚 猶  
花ノ晩キヲ 処ロ玉子  
菊花ハ秋ノ末ニヒラク

早シトナリ


下毛花 繡線箱  
の葉に似て小ま

花をのくく 金盞草  
花黄白  
淡赤色あり

金錢花 花紅み  
金銀

花  忍冬の花之黄白  
交咲く故に名つく

金銀花 花紅み  
金銀

夏菊  種類中多異名秋菊の一所あり  
夏菊ハ仙舎といふ葉の形宗節

夏菊

種類中多異名秋菊の一所あり  
夏菊ハ仙舎といふ葉の形宗節



**茴香** 色薄黄 **時計草**

花日の内ふつろくしかりる  
是ふよして時計の名あり

**威靈仙** 花淡紫 **鼠李** 鳥糞子  
牛李

**美容柳** 金線桃 花黄  
木央柳 ちり

治積痞法 九州大祿の諸士  
平素積を夏憂へ死ふ至り其

子小遺棄して死せば腹をこ  
き積と見て何もの相とす

是を見よと命を子遺棄を  
だしかくよと許へ腹をこ

果して積塊あり甚どかす  
利刀とくく刺しあつて種

種の菜物を以てとげ共う  
変せど其中一入楊枝を以て

飯初より其で白たらしむ  
ふ是びやう柳を作る楊枝を

故は右柳の葉を煎してをき  
く其積塊たらしむ消滅云り

**酢漿草花** 一名酸母。片葉三  
ある故かををよふ

**蛇林子** 異名 蟠藤。蛇末。葉  
。虺狀。馬牀。花白く積

りまう。蛇喜んで此草の下に  
一其寒を食ふゆへは名つを

**蕺菜花** 異名 菹菜。魚鱈草  
花四葉以て白葉鱈

**草石蠶** 異名 甘露子。土 蛹  
。滴露。地瓜児。五月

根と堀り蒸し煮て喰ふ味  
百合のこく根老蠶の故名なり

**接契花** 名ひついで。花  
。本草綱目云其莖

蔓亦似て強く刺あり葉馬の蹄  
のぶとくく光沢あり秋黄なる

花をひくくつろり。俳借の季  
は古来より夏とする故爰に出す

天南星花

一名虎掌。和名

苔花

一名地衣草。淋雨の  
時花の形の如く

生ど是を苔の花と云ふ

種類。石苔の如く花丈の如く

○井中苔。井の中へ生ず  
○垣衣。垣の北陰へ生ず

昔邪と名づく。一名烏韭。又屋  
上へ生ずる者。屋遊。又瓦

一。昨葉何草。玉柏。巨  
生ど。松の

朝菊。四月  
おとく。紫色なり

の内紫。碧色の花と云ふ。朝  
朝開。暮。故。名づく

豌豆引。一名胡豆。胡。又。翻  
搦。花の形。蛾の如く

蠶豆引。其。其。故。名  
づく。収。取。る

花且見

菘の如く。花丈

○万葉。むら。さ。さ。の。ふ。あ。う。に  
く。ま。つ。て。も。ぬ。ぬ。も。す。り。も

花菖蒲

花葉かきつる。不。以。て  
紫。白。飛。入。種。々。あり

菖蒲

軒。よ。ふ。け。る。の。泥  
菖蒲。より。石菖蒲。の

小葉。より。盆。中。ふ。う。へ。て。受。す  
る。奇。異。い。つ。ま。も。混。じ。て。あ

や。め。く。よ。め。り。葉。と。す。る。石菖  
根。より。根。の。長。く。賞。う。て。長。き  
根。と。と。ま。り。未。だ。く。九。丁。目。有

○年。中。行。り。 經。賢。僧。都  
み。さ。あ。ま。の。な。め。と。あ。ま。り。葉

ひ。の。け。つ。さ。も。か。ひ。し。け。ら。ん  
家。集。 雨。中。菖。蒲。 法。性。寺。入。道

雨。中。菖。蒲。と。云。ふ。あ。や。菖。蒲  
と。人。葉。と。と。ま。り。あ。れ。り。や

白。川。殿。 菖。蒲。 推。言  
ふ。の。の。け。は。あ。ま。り。あ。れ。り

草庵 水辺菖蒲 頃阿

きよなる花のつらき花の葉をひて  
あやせとよける庭の池あり

○江師菖蒲を献せしむ 狀  
進上 水邊菖蒲

千年五月五日大江御武  
皆人とも得たりと師頼卿よ  
まればるるを

詞はあはれあめふ風かほる。

みどりすまじくまぢりあふいそ  
ふとせ年におくくしあやせの

櫻をきふくし人部ふのあやめ  
の根をわたりてふくまはる

小舟 釜田池 釜田川 出雲  
△高蒲つえの月ろくまのこ

連かり枕せしけふあやせの 牡丹花  
入まじふ小家もはるあやせの 紹巴

俳句のよきあやせのあやせのナ  
はるあやせのあやせのあやせの

狂 皆人のこころふとよはの花あやせ  
あやせのこころふとよはの花あやせ

雪中 虎耳草 石荷  
葉 夏花有冬冬

朝露草 銀銭花 楮の似  
て白青うらうらあり

底黒紅のこころあり葉三出五出  
あり西瓜の葉の似たり高さ

二尺そくろ枝あり朝又  
ひらききゆふべは葉あひさる

長根草 江蒲草 石龍角  
○すくふ生れまは

穂のどくた 蚊帳釣草 草  
小花さく

木の類よりがまの葉に似て其  
くまこ三つどあり花薄あかり

玄及 五味子 花黄  
白紀州の産は

萍花 萌出る春さる  
夫木 為家

みづうしに任さやこるんは海ノ乃  
湧き出さる中川のあ

非 うれまマ草の  
あられな又候し由 藻花馬

水蘊 △藻こゆ △藻川舟  
夫木 貫之

りかもし今日と云ふくはさる川  
あつて又くまをうらん

連 花のさき出さるる原が細巴  
非 池をたふし面あはれを望 嵐雪

蘭のむや金魚の 鉄線花  
くさへふまれ 其角

二月 苗宿根より生じ  
四五 月花咲くよりほふ

詩 鉄線花之詞 賈昌朝

披雲似有凌雲志 志 出タル  
見ヘルハ 向日寧無捧日

心 日ニムカイテ花ノツカヘ  
ウヤフテノ心テアラウ 珍重青

松好依 托 ツルクサナレハヒトリノツ  
カ、リ 直從平地起 千尋雲

タルク 直從平地起 千尋雲  
テ松ニヨリテ高クホリエタツ

撫子 瞿麥の 蓬麥  
南天竺草 天菊

大蘭 巨句麥 洛陽花 よもぎ中  
さあや中 △石竹 △常夏へみでこ此三

品同種 今分けて二種とす 花  
びの免がきさみ有て切こ

ある月のそまてこと一切を  
まふさるのそ石竹と名づくる

○茶は用る 瞿麥 △かりほほで  
或りのせれちくとつみのそ花色

薄紅るり △倭撫子 莖葉あつ  
かく花紅紫白 單葉 千葉 數種

あり △藤撫子 莖ふく 葉あま  
それちいさく 負拮梗は似て白

紫と帯る ○阿蘭陀 石竹 莖株  
ふとく葉こへく 花も又さかして

大輪多り。○京撫子株よく莖  
ねよく葉中ぬとより。大きく花一  
重紅なり。其外数十品あり。

⑤ 家集 俊頼

君より代のたきまひく人春日祥の  
つれ弁にも花さけみけり

久安百首 俊成

庭の面のき地り上のむくしき  
ちとよふまけりところのむくし

拾玉 久慈瞿麥 慈鎮

ふりこけられぬまふまふあそ  
抱る文あふうらうらひはく

家集 瞿麥夾木 仲正

夏草の下初水こまをちりて  
ふりくうらふ候大和まてしこ

家集 瞿麥満庭 清輔

庭の面けうら撫子りねまふ  
ふりて入庭さくふふふふ

夫木 夜思撫子

白く人のあけおさわうふふを  
けりふてしこけりやねわ

詞 咲。句。ら。さ。か。の。綿。つ。ろ。く。  
ほ。が。れ。垣。根。日。夕。多。き。ま。げ。み。が。中。

咲まらる。萎み床しりうらうらう  
とよむべし。ちりぢりさくふをち

とむる。妹。い。ひ。く。我。わ。り。と  
こまののまこよふなり。紅を

か。く。れ。る。井。日。々。し。の。ま。  
大和なをてしこ。まふ

こは子いよまふあかこをて  
しこ。おほししうらうらうら

やまをく。露。あ。の。か。い。を。あ。り  
大和撫子か。撫子。ま。ね。撫子。ま。ね

あ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。  
あ。く。と。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。

あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。  
あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。あ。ゆ。り。

狂かそつろを四ノ人かひねゆの  
あつらふよふさ(此)のころ行風  
雨ふまり衣履(此)のころ  
鼻(此)のころとるるおほゆ 全

詩 瞿麥之詞 唐 司空曙

一自幽山別相逢此寺中

一ヘカタ幽山ニテ見テカラニタ  
此寺テオホクノ花ヲ見ルダ 高低

俱出葉深淺不分叢

ト野蝶難辨白底榴暗讓

紅白キ花紅ノ花外ノモ  
ガ及バ又見ゴトナダ誰憐芳

草色春露到秋風 花ノツツク  
ニキテ其  
スルコトバナリ

田植 早苗取 苗の長七七八

早苗とりこもつるもつる  
非合羽若て友とあつるもつる 其角

早乙女 女の苗植云(非)早乙女  
のよこれれおほ朝夕其角

田歌 苗とつる時声とあけ歌紙よ  
(連)声の色も若苗とあつるもつる 相

非早乙女のあけ止まり 郭公 舞候

田草取 苗とつる十四五日む  
わつとれの上より

見えされも草の根土中よとび  
らけり早く葉ふはとらけり

とくまはまは草の根とびこり  
苗とつる十四五日にて草と

報其後ヤクとつる草とつる  
報 鋤とつるの季は六月とつる

新撰六帖 知家

志ののころあつる種まはるる

非美ふ子とあつるさるる田舎小竹戸

早苗 若苗 玉苗 初より  
〇ワタリ 〇ツツク

〇四月と名五月中入る苗とつるの午  
日程と八九すより一尺やと成ると云

家 夫木

人丸

あまのりいふ面の小田ふはれ

面々のらも面よりつづき

西行

あまのりいふ声ゆ極女のくやうして

山田のこもへしあまのりいふ

定家

兼久五十首 早苗多

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

為家

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

寛元寺合 社邊早苗

知家

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

建武寺合 夕早苗

範宗

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

家集 雨後早苗

仲正

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

常盤井百首 門田早苗

仲正

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

詞 振替く小田。あまのりいふあまのりいふ

小山田。あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

あまのりいふあまのりいふあまのりいふ

〔**陣**〕花さる竹ふらつちひあ葉の紫紙

〔**非**〕美竹や鞍ふらわりのお旅のしほ

〔**乙**〕竹や雪のまきまき乙由

〔**美**〕弁のうらやまたり雀のる 龜洞

○竹さるゆゆ竹解日かたうさ

正月朔日二月二日十二月十二日小

うゆぐし雨後うゆ色は活し安

○信濃小竹さしあはれは竹條竹を

るり正月かま松さるり **篁竹**

立て竹いかさす

細長く節ひきして **業平竹**

直ちり矢竹小用ゆ

雄竹の如く節は雌竹小似し

女竹男竹の見分るる心業平と云

**観音竹** 葉短くは **志多竹**

かま竹 **布袋竹** 太きか竹之

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

節は竹の節は竹の節は竹の節は

古今

買之

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を

古今

買之

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を

美花るはのほあ雨は是を



はひよりとれまきりて

俳 初日新まきりて

石苜 俳 石苜のゆへに

和布刈 正字石苜○紀州

海帶刈 類なり

李之子 名 嘉慶子 明李 来南

李之詞 唐 李嶠

潘岳間居日 潘岳字安仁

王戎戲陌辰 王戎

蝶遊芳徑馥 芳徑花

葉暗青房晚 青房ハフ

花明玉井春

方知有靈

時用表真

人

李 晋ノ王戎七歳ノ時

李ノ樹ノ下ニテ遊ブ李子ノ多

我先ニト拾ヒ取ル中ニ王戎ハカリ

ガ云ク路傍ニアル李ニテ人モ取

テ食レザリシト

世説ニ見ヘタリ

核ノナキハ龍ノ身ヲ割ル

其血ノ落タル所ニ李ヲ生スルト

イハ 三知豊好李ノ木ヲ  
持テ價貴ク賣ル

他人ツノ種ヲ植ニ事ヲオツレ  
テコトククツノ核ヲ鑽タリトス

李接法 桃木小とくくの枝と  
はちを突くれをぬかすは

楊梅 紅白紫の三種あり泉  
州大義は生むりの尤佳なり

非中 ありふたつあるは経の香永我

冬花採 盧橘  
冬ハ橘ノ実ヲ花  
ニタトヘテトリレツ

夏菓摘 楊梅  
夏ハフセモノニシク物  
ナキヨツテツミトルナリ

樓閣兩山 搖碧落  
嬌暮春  
ハルニスエサク

楊梅千 礪瀉紅泉  
一庭花  
イツテイノハナ  
ニハニヒラク

高林帶雨 楊梅熟  
故園春  
コキウノハナ

山岸籠雲 謝豹啼  
帶雨閑  
オニテアミチニラク

折來鶴頂 紅猶濕  
揚梅ハヨ  
シク天雀ノ

丹頂 宛破 龍睛血  
未乾  
カクカクノ

似たり 宛破 龍睛血  
未乾  
カクカクノ

若使太真 知此  
中

得到長安  
到著スル事ハアルマジ

氣條桃  
あくのふれ子を根  
をひの実多く大い

無花果  
映日菓 優曇花  
花をくして実なる

初青く 熟をれば 紫黒色 味甘  
淡一〇 涅槃經云く 佛出世

蘇枝楊梅ヨク似たり  
ヤモモ、ヲ茶言テ 詩ニ云ナリ

詩 揚梅之詞 唐 李嶠

詩 全七字對句 詩礎

鳥曇花を喻へて掃き事  
いふ即ちの無花菓の事あり一  
千年の一度花を聞くこと  
の安誕なり ① 玉椿まきみぐ  
君の代は百回う嘆 **天仙菓**  
和州山中ふあり花さくして実  
をむと枇把に似て小づい小  
児好ん **枇把** ② 非 飢いの政あり  
で食ふ **枇把** ③ 枇把のこま  
光廣卿 **毒虫** ④ 枇把のこま  
報きていふ志のぶがたの  
に枇把の核を甜くしてこれを  
はくをむと枇把の頃み治す

詩 枇把五字對句

楊柳枝々弱 媚々碧海風  
枇把樹々香 濛々綠枝香

詩 全七字對句 詩礎

回看桃李都無色 對春淺

喚得芙蓉不是花 正滿林

万里青障蜀門口 味尚酸

千樹紅花山頂頭 溪水流

**青梅** ① 梅漬る ② 餅梅 ③ 煮梅 ④ 梅

⑤ 青梅の葉をよめてのいんち ⑥ 餅梅

⑦ 餅梅といふは梅のつくる ⑧ 餅梅

⑨ 餅梅は足付て餅る山踏外 ⑩ 餅梅

⑪ 餅梅をよめてよめてよめてよめて

⑫ 餅梅をよめてよめてよめてよめて

⑬ 餅梅をよめてよめてよめてよめて

詩 青梅之詞

天賜胭脂一抹腮 胭脂ハ紅

ナハシ 盤中磊落笛中哀 各梅

イフ笛ノ 雖然未得和楚便

五月 草部

益毒和養ノコトヲ書經ニ見ヘタリ

曾興將軍止

渴来 ナリ將軍ハ曹操ノコト

ライ

杏子 甜梅の味甘く梅ふびの酸根のあ

さばものちり石を根に置

て背にいざれば実多し

櫻桃 紅色より朱櫻と紫色

季ハ三月 細黄志あるものと紫櫻と

名づく味尤美之黄きものと蠟櫻と

の薄紅を櫻珠と名づく

○中夏天子は含桃と名づく

事あり礼記に出さる

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官 御殿ニ官

人ヲ集メ

會宴アリ紫禁朱桃出上蘭庭

ニテ櫻桃 纒是 寢園 春薦後

ヲ賜フゾ

春薦先相ヲ 非關 狂死鳥脚

春ニツルナリ

殘 春華ノヒモイギニテ 翠華

滯 青絲籠 退出トキ 符領セシ

中使頻傾赤玉盤 テツカハスニ

飽食不須愁 内熱 コラヲタベレ

ヒナシ 大官還 有 蔗漿寒 高

ノ官人ハアトテヒヤリト

砂糖ヲ用ユルナリ

桑實 正字 青小柚 音く

生胡桃 新撰六帖也 ぬか

持揚 光俊 早松茸 五月

あり

出るを

五月

草部

益毒和養ノコトヲ書經ニ見ヘタリ

曾興將軍止

渴来 ナリ將軍ハ曹操ノコト

ライ

杏子 甜梅の味甘く梅ふびの酸根のあ

さばものちり石を根に置

て背にいざれば実多し

櫻桃 紅色より朱櫻と紫色

季ハ三月 細黄志あるものと紫櫻と

名づく味尤美之黄きものと蠟櫻と

の薄紅を櫻珠と名づく

○中夏天子は含桃と名づく

事あり礼記に出さる

詩 櫻桃之詞 王維

勅賜百官櫻桃

芙蓉闕下會千官 御殿ニ官

人ヲ集メ

會宴アリ紫禁朱桃出上蘭庭

ニテ櫻桃 纒是 寢園 春薦後

ヲ賜フゾ

春薦先相ヲ 非關 狂死鳥脚

春ニツルナリ

殘 春華ノヒモイギニテ 翠華

滯 青絲籠 退出トキ 符領セシ

中使頻傾赤玉盤 テツカハスニ

飽食不須愁 内熱 コラヲタベレ

ヒナシ 大官還 有 蔗漿寒 高

ノ官人ハアトテヒヤリト

砂糖ヲ用ユルナリ

桑實 正字 青小柚 音く

生胡桃 新撰六帖也 ぬか

持揚 光俊 早松茸 五月

あり

出るを

五月

草部

四五日雨後生ると早初云  
非 瓜 蔓るや杖を早初身風聲

瓜加子 (異名 崑崙瓜 草薺 甲)  
俗諺 秋茄子嫁ふとい

瓜の中は... 幸や万葉集

瓜 瓜の中は... 幸や万葉集

瓜 瓜の中は... 幸や万葉集

瓜 瓜の中は... 幸や万葉集

初茄子 (異名 新茄 和系茄)  
水茄 早く出づる瓜

瓜花 (甜瓜 越瓜 姬瓜 浅瓜 胡瓜) 瓜花とて花咲

瓜花 (甜瓜 越瓜 姬瓜 浅瓜 胡瓜) 瓜花とて花咲

瓜花 (甜瓜 越瓜 姬瓜 浅瓜 胡瓜) 瓜花とて花咲

瓜花 (甜瓜 越瓜 姬瓜 浅瓜 胡瓜) 瓜花とて花咲

早瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

瓜 (瓜) 瓜花とて花咲

粟蒔 句ふじらふ夏と  
夏粟は二月より

五月まをまう、秋粟は六月  
下旬より七夕頃までまく

稗蒔 五六月時とさ  
ふりのまう洪水或は旱損  
どの時苗のあま作てうく

柀蒔 四月五月くば小き  
ひ、六月ふれまう

胡麻蒔 四月五月雨うて  
こあつ時きくはとす

種植 秋大豆、秋小豆、櫻  
楠、茶、菜、豆、移

栽 菊、梅、梨、壅土培  
植、管、橋

牡丹、芍薬、柀木 梅花  
芙蓉

茶、石榴、櫻、桃、薔薇、山梔子  
梅雨の中枝と切る池ふさぐ、活す

収採 蓮、房、天、浮、杜、仲、夾、冬  
葛、菱、菟、乾、漆、藍

生類 此部より五月の諸  
の生りあつてくる

獸狩 兎、射、火、串  
夏の狩と苗とつ、王者洗炭乃  
初ふに即獲物の宗廟に供

下の土敷ふ、本、輪、の、入、け、り、を、念  
せとつ、も、夏、の、殊、を、損、せん、心  
恐、て、是、を、防、ぐ、故、小、季、と、ま、る、る

火串とつ、育、の、火、を、ま、わ、  
て、山、中、か、入、ま、バ、鹿、を、の、火、を、  
よ、ふ、を、弓、に、て、射、て、取、る、を、  
い、ふ、なり

夫木 小辨  
夕、ま、れ、の、り、の、り、の、り、の、り、の、り、  
中、で、採、り、の、り、の、り、の、り、の、り、

生類

生類

生類

生類

生類

生類

わらわもあふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり

あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり  
あふれもあはれなり





はなみえ拾芥ふ有えず 鶉うぐいすの  
とぞうりい秋なり

巢うぐいす 萱原うぐいすの巢 蛆うぐいすの  
蛆うぐいすの

初蟬うぐいす △蟬の初声。此ころ  
早くかきとけり

非初聲や笛うぐいすの角 蟬うぐいすの  
を十文字うぐいす其角

蟬うぐいすの五徳あり 頭うぐいすの文  
露うぐいすのひの清うぐいすの時節とたんと

鳴うぐいすの信うぐいすの黍稷うぐいすを享うぐいすの廉うぐいす  
とる所うぐいす穴うぐいすはとぞうりい儉うぐいすあり

新古今 横政大臣  
秋うぐいすの気うぐいすの末うぐいすの蟬うぐいす乃  
海うぐいすのあや下うぐいす系うぐいすのううぐいすん

夫木 俊賀法師  
夕うぐいすのけのそめ林うぐいすのううぐいすの  
夕うぐいすのけのそめ林うぐいすのううぐいすの

龜山殿うぐいす七音 樹陰うぐいす蟬 有北朝臣  
夕うぐいすのけのそめ林うぐいすのううぐいすの

夕うぐいすのけのそめ林うぐいすのううぐいすの  
夕うぐいすのけのそめ林うぐいすのううぐいすの

詞 鳴声うぐいすす。佐声林うぐいすの  
ううぐいすのそ。耳うぐいすのるうぐいすも。夏うぐいすの

好衣うぐいす。声うぐいすの。梢うぐいすの。ううぐいすの  
松風うぐいすの。声うぐいすの。は。ううぐいすの。ううぐいすの。

引うぐいすの。風うぐいすの。雨うぐいすの。  
ま。ううぐいすの。林うぐいすの。夕うぐいすの。相うぐいすの。

運うぐいすの。聲うぐいすの。ううぐいすの。ううぐいすの。  
隣うぐいすの。ううぐいすの。ううぐいすの。ううぐいすの。

狂うぐいすの。帆うぐいすの。帆うぐいすの。帆うぐいすの。  
帆うぐいすの。帆うぐいすの。帆うぐいすの。帆うぐいすの。

詩 蟬うぐいす五字對句 同上  
客吟うぐいす孤うぐいす嶠うぐいす月うぐいす 盤うぐいす雲うぐいす雙うぐいす雀うぐいす下うぐいす

蟬うぐいす噪うぐいす教うぐいす技うぐいす風うぐいす 隔うぐいす水うぐいす一うぐいす蟬うぐいす鳴うぐいす

詩 蟬うぐいす七字對句 詩礎  
數家うぐいす茅うぐいす屋うぐいす清うぐいす溪うぐいす上うぐいす 有うぐいす蟬うぐいす聲うぐいす

千樹うぐいす蟬うぐいす聲うぐいす落うぐいす日うぐいす中うぐいす 夕うぐいす陽うぐいす中うぐいす

ユウうぐいすニうぐいすクうぐいすセうぐいすミうぐいす ユフうぐいすニうぐいすシうぐいすクうぐいすセうぐいすミうぐいす

ユウうぐいすニうぐいすクうぐいすセうぐいすミうぐいす ユフうぐいすニうぐいすシうぐいすクうぐいすセうぐいすミうぐいす

垂緜飲清露 セミハツニミ 流

響出疎桐 キヨキ声ノ桐 居高

聲自遠 バトヲクキノハル 非是

藉秋風 コノハノクフカ

齊王之后王を怨 あつとあつて死す

化して蟬とる 樹に登りて鳴く

少人 少人

飛 梁の朱异道 事舎人とる

後中書郎 小除 時 小飛

鼓虫 小ガ黒ミ切レ水と

小鯨 鯨の小 鯨子 形小

水馬 鯨虫△錫賣云池川

赤色 赤色 鯨節 似たり 一説 味甚く錫の如くともいふ

蟪蛄 小ガ事 故 蚊の捷 集り

蛇脱皮 髪生妙方

餽餽 餽餽の粉 水 そそぐ 膏

廣 廣 切 切 右 右 の の 粉 粉 妙 妙 付 付 元 元 所 所 髪 髪 事 事 妙 妙

必用 此部より五月一ヶ月 要用の事とあるを

|   |     |     |     |
|---|-----|-----|-----|
| 破 | 夜五ツ | 夜四ツ | 夜九ツ |
| 軍 | 午ノ方 | 未ノ方 | 申ノ方 |
| 向 | 酉ノ方 | 戌ノ方 | 亥ノ方 |
| 方 | 子ノ方 | 丑ノ方 | 寅ノ方 |
|   | 卯ノ方 | 辰ノ方 | 巳ノ方 |

時刻 午後日午の刻事とある

用 用

出行作事 西北の方角の

天道西北より 樂事 月令より此

月や高明より居るべし遠きと  
眺望より山林より遊べしと  
あり夏山のけしき草木や  
さるるまげり青きとさるる

うらひのいまだあつさしらのみ  
あかきれよ至るごと日長く  
變るべし早苗のゆるもみど  
り〇螢見諸神諸社のけい

を〇五月雨をいそぐとこれあり  
て去り母やわらわの友ど  
ちかたりあひ書ふと見るも  
あよみさるるたのしみやう

天氣 此月袍雲起ると舟人  
をいそぐとくふ是暴風

梅豆宜し〇當月不熱十一月  
不凍〇月内寒くれば早の兆へ

養生 今月以後天氣熱する  
漸々なり謹んで風

地より生冷の物を食とぐ  
うは是をおとせ悪疾癰疽と  
生と〇此月屋根より上る事と  
忌む精神と脱と〇滋味と薄

くし和と極る事より奢欲  
と節より天樞中腕より灸と  
大暑のころえよりしめ保養  
とぐし精氣を放散せしめ  
ゆるし保衛とぐし遠望  
とぐし高明より居とぐし

衣服 當月四月まで裕と着す  
五月より帷と着す袴淺黄

女衣服 四日まで裕と着  
時

衣 菅蒲衣 表青裏紅 杜若  
衣 紅黄青 棟衣 表青裏紅

夏月衣服の徴と去る法 冬瓜  
の汁のくし洗へ能ふ

又法 枇杷の核を細末をこぼし  
へそよく去るるなり 又法 梅の  
葉を煎じて洗ひてす

青梅の枝折を葉も実も藁  
よそよくこぼし別な梅と皮む  
こて水は漬し醋と出し其醋  
一外に寒の水一外に合和しく  
漬しこび入用の時より出し水  
に生るるなり葉も実もぢりじ  
てよく持つ 烏梅と製する法

青梅をとり皮とくづり核と去り  
かごに入火上かへり置いて後もあ  
用の年中青梅と貯る法 青竹  
を二つ小割り青梅と入し其の如  
く合せ藁よそよく其上を山土  
にて塗りあち地を掘りて埋め置  
べし来年もとも損せりて持つ  
用る時竹を引とり入用やく取  
りぬの如く埋め置べし

### 五月飲食料理献立

好温暖の物を食ふべし此月  
物腹中却て冷物よりかぶる  
禁 冷物及び生瓜蜂蜜を忌む  
物 〇びと焼肴一時小食ふべし  
谷川の停水を飲べし魚鱈  
のよれ水より是とのい瘴を

料理 汁 小豆 丸い 手 みるす け  
竹の子 けい けい けい たき

たい けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい

塩いなり けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい

差味 けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい

煮物 けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい

竹の子 けい けい けい けい けい  
けい けい けい けい けい けい

吸物 たつた

小の かき うづ 青 和 あ

會物 あひ ま あ あ

精進汁 あ あ あ あ

清汁 あ あ あ あ

膾 あ あ あ あ

差味 あ あ あ あ

者物 あ あ あ あ

和會物 あ あ あ あ

か あ あ あ あ

吸いの

かいどろ 牛房 か か か

五月用意の品

野生姜法 生 生 生 生

生筆貯法 生 生 生 生

薑鹽漬法 薑 薑 薑 薑

梅酢漬 梅 梅 梅 梅

少一緋切 少 少 少 少

べ べ べ べ べ

か か か か か

ては黴<sup>カビ</sup>まじりて 魚<sup>イサ</sup>王子<sup>オウジ</sup>

極暑の時魚と三枚をわろし大

鉢に水一盃入置き塩を入ふ

り其後王子を入れて見ふべし

玉子<sup>タマゴ</sup>沈むるは又塩を入たり

かぶるは玉子の玉子も物に

このかひんひて魚もくたまり

物也 梅酒の方 古酒 手梅

砂糖<sup>ハチ</sup> 右梅少しも瓶のなまこを

見て花のされをとり 飯粒<sup>イハ</sup>にして

一夜灰汁<sup>ハイジ</sup>漬洗ひ水氣をぬぎ

酒へ入ふなり 飯の饅<sup>イハ</sup>り法

菟<sup>ウ</sup>の葉と飯の上をかきと一夜

を経てもとへると 生魚と

貯<sup>イハ</sup>る法 鮎<sup>イハ</sup>の粉をふいて

其中小魚をけし油を入れ置

い損<sup>イハ</sup>る事あり 又方 寒

中の雪水<sup>イハ</sup>はひじおけハク

々損<sup>イハ</sup>せす



五月部終

ヤコウの子 **吸物** たのしみ

小のり **和** 青丸

**會物** らしいて

小豆 **精汁** あかひん

進汁 **清汁** 漬物

臍 **差味** 白すり

**者物** 古梅干

**和會物** 生筍

かき **吸りの**

かいご **五月用意の品** 左

かき **生筍貯法** 生筍と桶

かき **薑塩漬** 薑を

かき **梅酢** 漬へ

かき **少一** 緋切

かき **べ** かくの

かき **一年**

かき **経**

かき **水気**

かき **漬**

かき **茶**

かき **置**

かき **入**

てれ魚 魚王子

極暑の時魚を三枚よかり大

鉢に水一盃入置きて塩を入

り其後王子を入れて見ふ

玉子沉ひるるは又塩を入

かるといひ玉子をも物

このかりんにて魚をくた

物也梅酒の方古酒梅

砂糖心右梅少しも疵のな

見て花のこれとて飯粒と

一夜灰汁漬洗ひ水氣をぬ

酒へ入るなり飯の饅り法

菟の葉と飯の上かきと一夜

を経てととて生魚と

貯ふる法温鮎の粉をふひて

其中小魚をけし油入れ置

い損事あり又方寒

中の雪水よひじおけハ

々損セす



五月部終



